

■ 編 集 委 員

齋藤 一之（委員長）

穂田 真澄

板橋 明

糸山 進次

小山 勇

清水 道生

鈴木 洋通

竹内 勤

土田 哲也

西村 重敬

松下 祥

丸山 敬

持田 智

渡辺 修一（五十音順）

■ 編 集 後 記

「何が知りたいのか」

西塚泰美（やすとみ）先生は、ノーベル医学生理学賞に最も近い日本人として、毎年のように新聞等に紹介され、御存知の方も多いと思います。残念なことに、西塚先生はつい先日、72才で亡くなられた。先生の業績は、細胞内情報伝達系解明の突破口となった蛋白質リン酸化酵素C（Cキナーゼ）を発見し、その意義を確立されたことです。そして、この酵素が細胞増殖・発癌にも重要な役割を担うことが知られ、先生の論文の引用件数が1984、86年と連続してNo.1であったことはよく知られています。

冒頭の「何が知りたいのか」は、本庶佑先生の追悼文にあった言葉です。その一部を抜粋させて頂くと、「先生は学問に対して極めて厳格であり、論文を批判的に読むことを説いた。また、流行に追従せず、自分の興味を大切に、物事の本質を追求することの重要性を教えた。そのためには、自分の問題意識を明確にし、「何が知りたいのか」と自問するように論じた」とあります。編集委員ならびにレフェリーとして、論文をみる機会が増えておりますが、「何が知りたいのか」という著者の情熱を感じさせるような論文と巡り会えたらと思います。

科学論文に情熱など求める必要は無い、と言われるかもしれませんが、一編の論文を仕上げるのはなかなか骨の折れる仕事です。それを成し遂げるには、大きな情熱が必要です。そして、出来上がったものを世に問うわけですから、その発表形式も大事です。埼玉医大誌もオンラインのみとなり、狭山茶のグリーンをイメージした表紙の雑誌が手許に来なくなり、埼玉医大誌への関心がオンライン化によって薄れてしまった、と感じているのは私だけでしょうか？

論文の発表形式に関しては、オンライン化の波は止まらないでしょう。オンライン化は、インパクトファクターの高い雑誌のみに関心が集まるのを加速させるように思います。埼玉医大誌に求められるのは、インパクトファクターではなく、自分の身近な人あるいは教室の情報を得ることではないでしょうか。埼玉医大誌の目次だけでも配布してもらえないものか、と思いますが如何でしょうか。ところで、この一文もオンライン化により、はたしてどれだけの人の目にとめてもらえるのやら・・・。「駄文はそれでいいの！」と言われそうなので、ここで筆（キー?）をおきます。

（穂田真澄）

埼玉医科大学雑誌

<http://www.saitama-med.ac.jp/jsms/>

第31巻 第4号 通巻115号（季刊）

編集責任者

齋藤 一之

平成16年9月30日 発行

発行所

埼玉医科大学医学会

350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38

電話 049(276)2125(直通) FAX 049(276)2127 E-mail: igakkai@saitama-med.ac.jp

郵便振替 00540-6-19727

制作

株式会社アテネデザイン

東京都港区三田1-11-19 小宮ビル2階 電話 03(3456)5741(代) <http://www.atene.co.jp>